

「盗人（ぬすっと）の親玉」薄熙来

薄熙来（はくきらい）は、保守派の旗手として第17期中国共産党中央政治局委員兼重慶市党委員会書記を務めた。

薄が赴任した重慶市は、1997年に「西部開発の拠点」とするため4番目の直轄市に格上げされた都市であった。しかしながら、薄が赴任するまでの10年間は外資投資が進展しなかった。2003年までの投資総額は5億ドルに届かず、2003年から2007年の合計もわずか10億ドルだった。ところが、薄が赴任し外資導入に着手すると、2008年の外資の投資額は対前年比170%増の27億ドルとなり、翌年には39億ドルを達成した。薄は年16%を超える超高度経済成長をつくり上げ、重慶の庶民に発展の恩恵を実感させた。

その一方で薄は、貧富の格差が深刻で、腐敗した役人や警察ら権力者が威張り散らし、それに大衆の不満が爆発している重慶社会の危険な現実を的確に把握していた。重慶での政治実績を以て、来る第18回党大会で最高指導部である中央政治局常務委員会入りを目論む薄は、低所得者層に未だ根強い毛沢東の政治手法をまねて民衆の支持を獲得しようとした。「共同富裕」のスローガンを掲げて格差是正や平等・公平をアピールし、民衆をひきつけた。そして、大衆を動員し毛沢東時代の革命歌を歌わせる政治キャンペーン「唱紅」を展開した[6]。「唱紅」の目的は古き良き共産党のアピールであったが、これが思わぬ懐古ブームを巻き起こし、人々から好評を得た。また、2009年6月からは犯罪組織一斉検挙キャンペーンである「打黒」を展開した。同年7月より市公安局などを巻き込んだ大規模汚職事件の摘発に乗り出し、1500人以上を摘発。

重慶における薄の施政は、中央の幹部にも好意的に評価する声が多かった。江沢民派（上海閥）の呉邦国（党中央政治局常務委員・全人代常務委員長）、李長春（党中央政治局常務委員）、賀国強（党中央政治局常務委員）や、太子党の習近平（党中央政治局常務委員・国家副主席）などは、薄の施政を「重慶モデル」と称賛した。薄の施政は、行き過ぎた市場経済を追求した改革の結果、平等・公平という社会主義の本質が失われたと批判し、毛沢東時代への郷愁を前面に出している。これは胡錦濤・温家宝が目指す「鄧小平路線の進化」と対立するものであった。薄は重慶市民の支持を背景に胡温体制と対峙し、重慶を独立王国と化していった。

2011年11月中旬、重慶のホテルで大連時代から薄熙来一家と懇意であった英国人実業家のニール・ヘイウッドが死亡しているのが発見された。当初、重慶市当局はすぐに死因を急性アルコール中毒としていたが、のちに関係者の証言からヘイウッドが禁酒家であることが明らかとなり、殺人の疑惑が急浮上した。イギリスは中国に英国人実業家死亡事件の全容解明を要請した。重慶市公安局長で薄の腹心であった王立軍が捜査責任者として、重慶市公安局が英国人実業家死亡事件について再捜査に着手した。重慶市公安局は捜査によって、薄の妻の谷開来（中国語版）と薄の生活秘書が英国人実業家を毒殺したこと、英国人実業家が関与した薄一家が数十億ドルにもものぼる不正蓄財した財産を海外送金してい

た疑惑があること、薄一家が不正蓄財した財産について谷開来とヘイウッドとの間に諍いがあったことが事件のきっかけであることを把握した。

薄は記者会見を開き、「自分は汚職の調査対象ではない」と述べたが、3月14日、国務院総理の温家宝は、全人代閉幕後の記者会見で、薄の「唱紅・打黒」運動を文化大革命になぞらえて批判した。3月15日、党中央組織部は、薄の重慶市党委書記職解任を発表した。4月10日、新華社は、ニール・ヘイウッドは他殺であり、この事件に薄熙来の妻・谷開来らが関与していること、谷開来らがすでに司法当局に身柄を送られたことを公表した。そしてこの日、党中央は、薄熙来に重大な規律違反があったために中央政治局委員・中央委員の職務を停止し、党中央規律検査委員会に審査をゆだねたことを公表した。9月28日、党中央は中央規律検査委員会の調査結果を受け、薄を党より除名、公職より追放し、また刑事訴追することを決定した。10月26日、全人代常務委員会は薄熙来の代表資格の取り消しを決定。これにより、薄は全ての公職から追放された。2013年7月に薄熙来に対して、遼寧省時代の職務に絡んだ約2000万元（約3億2000万円）の収賄罪と約500万元（約8000万円）の横領罪、重慶市共産党委員会書記時代の職権乱用罪で起訴されたことが発表された。

「薄熙来はまさに紅い皇帝だった。共産党一党独裁体制の中国では、地方の党最高幹部は、その地方の皇帝なのだ」。こう語るのは、重慶市トップや党政治局員などの職務を突然解任された薄熙来氏（62歳）をよく知る中国人ジャーナリストだ。取材を通じて、薄氏の人柄や生活など「プライベートな面も見てきた」という。薄氏の重慶の自宅の様子を次のように描写する。「重慶市街を見下ろす小高い丘の上に屋敷があり、鬱蒼とした竹林に囲まれていた。広々としたホールで待たされていると、召使いのような男性が現われ『こちらへ』と案内された。部屋がいくつもある、まさに『王様の邸宅』といった豪華な作りで、廊下にはとほとほ古い絵画が飾られていた。

建物は1棟だけでなく、棟続きにつながっている次の建物に入ると、すべてが竹作りで、見る者すべてを威圧するような、歴史を感じさせる応接間があり、そこに薄熙来が待っていた」・・・と。

薄氏は古都・重慶を代表する豪邸を自宅として使っていたのだろうが、ここは1945年8月、日本軍が降伏後、毛沢東と蒋介石が中国共産党と国民党による国共合作を話し合った歴史的建造物でもある。まさに重慶の“皇帝”にふさわしい居宅といえる。

薄氏が“紅い皇帝”であることを思わせるのは自宅ばかりではない。不正蓄財の額もまさに桁外れだ。当初、米ブルームバーグ通信が約110億円と伝えたものの、その後、香港メディアなどによって約1000億円、そして4800億円に膨れ上がった。それらが薄氏の推進した市の緑化事業や低所得者向け住宅建設計画などの原資になったとみられるが、一部は薄氏の個人的な不正蓄財に回されたことも否定できない。その使い道の一つの象徴が、薄氏の息子、薄瓜瓜氏（24歳）の海外豪遊生活だろう。同氏は英オックスフォード大学を卒業後、米ハーバード大学ケネディスクール（大学院修士課程）に進んでいるが、豪華マ

ンションに居住し、高級車を乗り回していた。薄熙来の不正蓄財の額はまさに桁外れだ。なぜなら、党機関紙「人民日報」によると、薄氏の月給は公式には1万元（約13万円）だからだ。

重慶市トップや党政治局員などの職務を突然解任された薄熙来氏。氏の不正蓄財は4800億円にのぼるとの一部報道もあるが、なぜそこまで中国の役人は儲かるのか。そのカラクリを大前研一氏が解説する。

政府は農民から収奪した農地を商工業地や住宅地に用途転換して転売し、差益を得ている。それが役人の不正・汚職の温床となり、農民の不満につながっているのだ。中国の役人の腐敗は度を越している。たとえば、先に失脚した薄熙来・前重慶市書記の場合、不正蓄財が1000億円あったとされる（約4800億円を海外送金していたとの報道もある）。だが、あのポジションで1000億円は少ないほうだと言われている。遼寧省の小さな市の課長を逮捕して調べたら、2000億円の不正蓄財が見つかったという情報もある。本人はクリーンに見えても、たいがい妻や息子、娘の夫など一族郎党が不正蓄財に手を染めている。誰でも叩けば埃が出てくる体なのだ。今の「チャイナ・リスク」を最も肌で感じているのは、当の中国人たちだろう。中国商務省の調査では、過去約30年間で海外に逃亡した汚職官僚は約4000人、着服金額は約500億ドル（約4兆円）に上る。また、今年3月の全国人民代表大会における温家宝首相の政府活動報告によれば、海外に逃亡した役人のうち1631人を逮捕し、海外で77億9000万元（約1013億円）の現金や資産を差し押さえたという。しかし、これは氷山の一角にすぎない。

さらに、中国国内事情に詳しいジャーナリストの相馬勝氏が役人の蓄財に関する実情を解説する。そもそも、中国では権威を利用してのコネクション・ビジネスが留まることを知らないという。ブルームバーグ通信（今年4月23日付）によると、国会に相当する全国人民代表大会（全人代）の代表委員の長者番付上位70位の資産合計は900億ドル（約7兆2000億円）で、これは米政府・議会のトップ660人の資産合計の12倍にも上るらしい。

不正蓄財のはびこる中国の役人の中でも薄熙来の不正蓄財は方はずれに大きい。上記の中国人ジャーナリストが薄熙来を「紅い皇帝」と言うのも、判らない訳ではない。しかし、薄熙来が紅い皇帝というのは適当でない。皇帝というのはその国に一人いるだけであり、薄熙来は地方の党最高幹部であったが、所詮、中国人共産党の最高指導者、私は今皇帝と呼んでいるが、その部下でしかない。中国人民共和国で皇帝と呼びうるのは中国共産党の最高指導者でしかない。

皇帝というのは、いくら贅沢な生活をしていても良い。それが原因で天命が下ってその座を追われることはない。しかし、皇帝の部下である官僚が贅沢な生活をするのは許されない。現在でいえば、中国共産党の下部組織の人間ということになるが、そういう下っ端がその権力にもとづいて不正蓄財を行えば、今皇帝、つまり中国共産党の最高指導者から処

断されるのは当然である。部下たるものは、今皇帝、つまり中国共産党の最高指導者に忠誠を尽くさなければならないのである。今皇帝に鉄槌をくだせるのは、天命だけである。天命とは皇帝にとって絶対的なものだ。では、天命はどういう場合にくだるのか？ それは人民、中国の場合、農民ということだが、人民の信頼を失った場合である。それは数字で表されなくとも、天帝が見て判断されるのである。それが天命である。

老子は次のようにいっている。『朝廷では官僚の汚職邪悪がまかり通り、田畑はあれ放題、コメ蔵はすっかり空っぽなのに、きらびやかな衣服を身にまとい、立派な剣を腰に差し、飽きるほど飲み食いし、財産は有り余るほど。これを盗人の親玉という。道ではないのだ。』・・・と。

道とは、宇宙の原理のことである。天帝がいちばん嫌うのは、皇帝自らが人民、すなわち農民をおろそかにすることと、皇帝の部下が自分自身の欲に溺れて農民をおろそかにすることである。薄熙来は老子のいう「盗人の親玉」であったのだ。